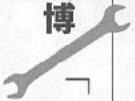
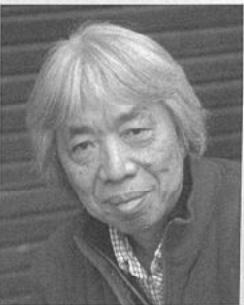


関満博



「強い町工場」教室 15

日本電産で培つたチャレンジ精神で新しいニーズを次々に開拓



せき・みつひろ
明星大教授、一橋大名誉教授。
1948年生まれ。成城大卒。東
京都商工指導所などを経て現
職。全国の町工場を自ら歩き、
精力的に調査し続けている

岡山県浅口市は飲料用ストローの生産地として知られている。しかし、中国などの安い輸入品が増えた影響で、世代交代を契機に廃業するケースが相次いだ。残っているのは数社で、ほとんどが家族経営のメーカーだ。

そんな中で、シバセ工業は異色の存在だ。ストローの生産技術を生かしてさまざまな業界に販売先を広げている。磯田拓也社長は創業者の親戚で7年前に経営を引き継いだ。従業員はパートを含めると約20人いる。

磯田社長は大学卒業後、日本電産のエンジニアを務めていた。シバセ工業に入社したとき、経営状態は厳しかった。

大口取引先である食品メーカーの需要が減少していたほか、

外資系コーヒーチェーンが急拡大する影響で個人経営の喫茶店の廃業が相次ぎ、ストローの外袋に店名を印刷する製品も落ち込んでいた。

それでも、磯田社長は諦めなかつた。製品の特徴を見つめ直しているうちに、

ストローが「極めて薄い素材でできたパイプ」であると気付いた。そこから「これほど薄いパイプは他にないのだから、きっと飲料用以外にも使えるに違いない」という発想にたどり着いた。

とはいっても、飲料用のほかにどんなニーズがあるのかは全く見当がつかなかつた。



シバセ工業の磯田拓也社長は外部の視点を生かし、新しいニーズを切り開いてきた

そこで磯田社長はインターネットを活用し、ユーチューバーに使

い道を考えてもらおうと考えた。

地力で自社のホームページを開設すると、「飲料用ストロー」と別に、「その他のストロー」というカテゴリを作

り、「薄いパイプが作れる」とアピールした。

するとホームページを見た人から「工業用パイプとして使いたいができるのか」という問い合わせが入つた。驚いた磯田社長はホームページのカテゴリ表記を

「その他のストロー」から「工業用ストロー」に変更するなど、細かな工夫を積み重ねた。その結果、次第にこれまでに付き合いのない業界からの問い合わせが増え、磯田社長は1件ずつに丁寧に対応した。

こうして、化粧品ボトル用や医療用、住宅関連用といった新たなニーズを切り開いていた。

さまざまな挑戦を続けてきた磯田社長は、今も日本電産の永守重信社長の「すぐやる必ずやる、できるまでやる」という考え方方に強い影響を受けている。永守社長の言葉を集めめた小冊子を作り、社員に配布するなどしながら、チャレンジ精神の浸透を図つ

いてきた。

従来のビジネスがへこんできた場合でも、それまで培つてきた技術を新しい時代のニーズと結び付けられたら、事業を伸ばすことができる。このとき、予想外の使い方をユーチューバーのほうが考えてくれるケースも少なくない。磯田社長は外部で培つた新鮮な視点で臨んだことで、新しいビジネスを実現できた。

さまざまな挑戦を続けてきた磯田社長は、今も日本電産の永守重信社長の「すぐやる必ずやる、できるまでやる」という考え方方に強い影響を受けている。永守社長の言葉を集めめた小冊子を作り、社員に配布するなどしながら、チャレンジ精神の浸透を図つ